

埼玉県税務連絡協議会会長賞

「助け合い」の輪

羽生市立東中学校

三年 恵 蘭

処方箋とお薬手帳を手渡され、同時に薬を受け取る。束の間、「お大事にどうぞ」と声をかけられ、別の患者が呼び出される。

昨年の中、初めて一人で病院を受診したときのことだ。私はこの一連の手順に戸惑いを覚えた。一円たりとも金銭を支払っていないからだ。もちろん、子どもの医療費助成について初耳だったわけではないが、いざ受付に立つと、本当にこれで良いのだろうかという不安に駆り立てられた。その上、これまでは両親に頼ってばかりで、医療費助成の制度やその仕組みについて、恥ずかしながらよく理解していないことを思い知らされた。

調べてみると、私の市では、「子ども医療費支給制度」によって、十八歳の三月三十一日まで、医療費が無償になることが分かった。市内に在住し、医療保険に加入していれば、所得に関係なく受給資格を得られるそうだ。しかし、薬というものは、決して安価ではない。また、医療職は非常に重労働だということも耳にする。市内の何千人という子どもがこの制度を利用すれば、きっと相当な額になるに違いない。

では、このお金は一体どこからやって来るのだろうか。

その正体こそが、税金だ。小学校の社会科の授業で、税金の種類は実に多様であることを学んだ。種類によって、納める場所や対象となる人などが千差万別だ。そうして集められた巨額の一部が、私たちの医療費に充てられる。つまり、私たちの医療費は、数え切れないほどの納税者に支えられているのだ。それは、私たちの健康を増進し、親世代の負担を軽減したいという思いがあるからに違いない。このように考えると、気軽に病院を受診できることの偉大さが分かった。「まだ中学生だから、お金は払わなくても大丈夫」だという薄い認識しか持っていなかった自分を情けなく思い、周囲に感謝すべきだと感じた。さらに、私の市では、高齢者にも、医療費軽減の制度が設けられているそうだ。また、道路の整備、ごみ収集、学校教育など、税金が利用されている例を挙げたらきりが無い。これらの共通点は、「助け合い」の精神だと思う。もしも、道路がでこぼこでゴミが散在していたら、住みにくく感じてしまう。また、学校教育を受ける機会が無くなれば、正しい知識や社会での決まりを身につけることができない。だからこそ、身近な人がより良い生活を送るために「助け合い」をする必要があり、その気持ちが一番普遍的に形として現れているものが、税金なのだと思う。

中学生の私に、納税の義務はない。いわば、現在の私は、「助けられる側」なのかもしれない。けれども、数年後には社会に出て、「助ける側」の人間となるだろう。このように、世代を超えて「助け合い」の輪が広がれば、日常のトラブルは一つでも多く解決されるはずだ。病院での出来事から学んだ「助け合い」の大切さを胸に刻んで生活していきたい。